

神道の女巫信仰で固められてをり、ことに、宇佐八幡宮は、女禰宜で名高い。天平年間には、大神杜女のごときを出してゐる。代豆女は、その前代の禰宜であらうか。

東大寺要録に、禰宜辛島勝與會女と見えてゐるのも同人であらう。兎に角、神軍を指揮して賊徒を討つたといふから、勇ましい女將軍である。

女將軍といへば、鹿兒島縣薩摩郡の大將軍神社、同肝屬郡の軍神社は、磐長姫を祭るといふ。

磐長姫は神代卷に見えてゐる女性で、天孫瓊々杵尊の妃木花開耶姫の御姉に當られ、醜女の故をもつて斥けられたといふが、あるひは山幸海幸の大戦争は、磐長姫の指揮するところではなかつたか。大將軍の名に興味がある。

古代の男女闘争

妻問ひの拒絶から、男女闘争に至る物語はなかなか多い。播磨風土記に都多支

といふ地名の由來を説いて、

「都多支といふは、昔、讃伎日子の神、氷上刀賣を妻どふ。其時氷上刀賣、答へて否といふ。日子神なほ強ひて妻どふ。ここに氷上刀賣怒りていふ、何故吾を強ひるや。即ち建石命を雇ひて、兵を以て相闘ふ。ここに讃伎日子負けてにげ去ると、我甚だ怯きかもといふ。故れ都多岐といふ。」とある。

この戦争は、法太の里や壺坂等にも遺跡があるといふから、當時の大会戦であつたらしい。

その他、同じ風土記には、石龍比古命がその妹石龍比賣命と川水を争ふ話があり、讃容郡條には、男女神おのおの競うて國を占むるとき、女神生ける鹿を捕へふせ、その腹を割き、稻をその血に植ゑたとある。

古典は面白い。(ホーム・ライン、卷一三・一〇)

その二

神

後崇光院の御日記、看聞御記の應永二十六年六月二十五日の條に、

「軍兵數十騎、廣田社ヨリ出テ東方へ行。其中ニ女騎之武者一人如大將……異國襲來瑞想勿論歟。」

とある。足利四代義持の頃である。

越えて八月十三日の條には、探題注進狀の寫しが出てゐる。

「抑六月廿日、蒙古高麗一同ニ引合て、軍勢五百餘艘、對馬嶋ニ押寄。彼嶋を打取之間、我等太宰小貳カ勢許にて、時日をうつさず、浦々泊々の舟着にて、日夜之間合戦を致之間、敵御方死する物其數をしらず。……さる間合戦最中、奇特神

變、不思議の事一廉ならず。敵の舟ニおいて南風震動す。雷とろき霰降。……合戦難儀の時節、いづくよりとはしらず、大船四艘錦の旗三流差たるが、大將とおぼしきは女人也。其力量ちからべからず。蒙古が舟ニ乗移て、軍兵三百餘人手取にして海中ニ投入了。……七月十五日、探題持範。」

とあり、院これを評して、

「雖末代、神明威力、吾國擁護顯然也。此注進狀正説也。」

こゝに女人の大將とあるのは、高貴な女神のことであらう。國家の危急の時に女神の冥助があるといふことは、固有の國民信仰に屬するのであらう。

怪

三代實錄の仁和三年八月十七日條に、

「今夜亥の時、行人が云ふには、武徳殿の東の松原に、美婦人が三人東を向いて歩いてゐた。其時松の樹の下から容色端麗な男が出てきて、一婦人と手を携へて

相語り樹下に導いた。數刻の間、話聲がしないので、驚いてみると、その婦人の手足は地に折れ落ち、首もない。侍達がこの知らせで往くと、すでに屍もなく、所在の人もゐなかつたといふので、人々はこれは鬼が形を變じて、この屠殺をしたのだらうと思つた。」

その翌日の條には、名僧百人をして大般若經を轉讀させたとある。

増鏡のむら時雨の條に、

「或時は紅の袴長やかにふみたれて、火ともしたる女、見るまゝに丈は軒とひとしくなりて、後にはかきけち失するもあり云々。」

後醍醐天皇の頃、三條富小路院での出來事であつた。

聖

文徳實錄の齊衡元年七月條に、

「備前の國から一人の伊蒲塞（○優婆塞）を買した。穀を斷つて食はない。勅命で

神泉苑に安置したが、男女雲會、市里このために數日空しといふ有様、天下呼んでこれを聖人といつた。婦人の類は眩惑して嗚咽せぬ者がない。しかし、この聖人は實は深夜人靜まつて後、水を以て數升の米を飲み込むので、夜明けには廁に行くといふ噂が立つた。ある人が廁を窺ふと、果して米糞がうづ高い。これより聲價がおちたが、婦人の類は猶ほ米糞聖人とよんだ。」
と見える。

産

續日本紀以下の國史に、三つ見、四つ見等に對して、稻何束、乳母何人など、賜はつてゐることが多い。

續日本紀の文武天皇三年條に、

「京職言ふ。林坊新羅が女牟久賣、一たびに二男二女を産むと。紵五疋、綿五屯、布十端、稻五百束、乳母一人を賜ふ。」

續日本後紀の仁明天皇承和十四年六月條に、

「常陸國新治郡人三村部綿女、一たびに二男一女を産む。正稅稻三百束、乳母一人を賜ふ。」

その母は、何某妻と書いてあることもあるが、概して、その記載がないのが多い。母を保護したので、恐らく、いまでいふ私生などは問題ではなかつたのであらう。(家庭新聞、昭二五・一)

道 遠 し

十年

昭和五年のはじめに計畫を發表してから今年で十一年、そのために翌年の半ばに世田ヶ谷の満中在家に新居を定め、世事を絶ち、この仕事に没頭してから恰度十年目に當る。

この間、病床に親しんだ約一年位を除いては、毎日朝から夜半まで孜々として努めたにかゝはらず、仕事は遅々として思ふやうには進まず、わづかに十三年に第一卷をまとめることができたにすぎない。

あゝ十年は一日のごとくに過ぎ、前途になほ四卷の難業を控へ、日暮れて道遠しの嘆が深い。

つぎに、折々の身邊記を拾つて、十年のおぼつかない足どりをかへりみ、さらに新たな勇氣をもつて今後を誓はう。

もともとこれらは、仕事のことを主題として書いたものではないから、中味の大部分はそれとは別のものである。たゞどこかに、女性史のためにくるしみ、祈りつゞけてきた姿だけは出てると思ふ。

秋さまづく

—

東京にきて何年になるのだらう。かなり長い時が過ぎたが、わたしは東京になじまないで、いつも故郷の熊本を懐かしんでゐる。わたしの友人は故郷なんて厭だといふ。さういへばそんな氣持も分らなくはないけれど……。

出てきたのは、それは恰度今頃だつた。老父は窓にすがつて見送つた。老母は山道をついてきた。別れる時、彼女はいつた。

「出世しなはりえ」

それは同時に老父の言葉であり、村の言葉であり、親類の言葉だつた。わたしはいつた。

「きつと出世します」

さういはずにはゐられなかつたのだつた。老父に對する、老母に對する、村に對する、親類に對する愛のために。

二

「何だか秋ですね」

とけふ人がいつた。わたしは近ごろ忙がしくて、まるで時を忘れた生活をしてゐる。

「秋ですね」

といはれて、さうだなと、見まはしたものだつた。

「秋はあなたのやうだ」

と同じ人がいつた。

「なぜ」

「無口で」

三

無口、これは人間の歴史の、ある時代の、ある不具な状態だらう。人間が「言葉は神なり」と考へた。「言葉は神であるから、神にふさはしく言はねばならぬ」と。すると、言ふといふことがむつかしくなる。富士谷御杖は、

「神さびはもと、ことばの用にもいたくまさる妙用ありて、本かれが中心に徹すべく、中心にだに入らば、ことばは無益のものならずや」(古事記燈)
といつた。

彼によれば、ことばの彼方に廣く深い沈黙の世界がある。言葉はそこから淨め

られて送られてくるものだ。さうでないうはごと、またさうであつても邪氣のためによごれて出ることばは、ことだまを殺すものだといつた。

彼は歌の題詠みを否定した。はじめに題があつて、後に歌があるのでは、それは自然ではないのだ。したがつてほんたうの歌はできないといふのだつた。

原始人は話すことそのまゝが歌であつたといふ。土佐日記の和泉灘の船路で、「船とくこげ、日のよきに」

と客がいふと、楫取が、

「御船より仰せたぶなりあさぎたの出でこぬさきに綱手はやひけ」

といふ。土佐日記の筆者は、

「このことばの歌のやうなるは、楫取のおのづからのことばなり……聞く人のあやしく歌めきていへるかなとて書きいだせれば、げに三十文字あまりなりけり」といつてゐる。

楫取の何でもなくいつたことが、どうも歌めいて聞えるから、書きうつして文

字をかぞへてみたら、立派に三十一字あつたといふのである。

「歌だのぬただの分らねえ」

などいふ者があるといふけれど、歌は實はさういふことをいふ階級から發生したもので、それを特殊の階級が獨占したものだらう。

四

秋は故郷を慕はせる。「秋ですな」といはれて、故郷なつかしの心が起り、「秋はあなたのやうだ」とあつて、わが故郷の沈黙の山々を懐ふ。薩摩から日向にかけての國境の山々——阿蘇、祖母、市房、白髪等々。

わたしは城南釋迦院岳の山あひに育つた。その近くには矢山嶽、一名袴腰、肥後富士ともいふ秀麗な山があり、その他にも、白山、雁俣、内大臣等の名山が遠近に起伏してゐた。

祖母はわたしをおんぶして、山のお化の歌をうたつた。

あの山に

びかびかするのは

月か星か螢か

月でもない螢でもない

あれは山下坊主の目のひかり

こんな歌で育つたわたしだった。

五歳の時わたしは「神隠し」にあつた。何かで父に叱られ、泣く泣く外に出たが、いつか裏山を登つてゐたのだつた。

その夜の山上の景色、それはまだ忘れない。月があつた。雲が膨らんでほうつと飛んだ。

「この美しさは何だらう」

と、おたばこ盆の袖無しの子は思つたのだつた。そして一晩ぢゆう見入つてゐたのだつた。

「思ふこと涙ぐましくありければ山にそむきて機を織るなり」
の少女時代の山も美しかつた。それもこれも今にして思ふとすべてはわが故郷の秋の山々だつた。

五

その山々の巖の中に、いまは父母の墓が、二つならんで苔むしてゐる。それを守つて弟がある。彼は才學惜しむべき人であるが、秋に似たその沈黙の性格の故に、山に隠れて出ようともしない。

また他の谷間には、やさしい舅や姑達がある。彼等も會ふたびに、秋のやうに老いて行く。

残してきた友人達は、消息を絶つてしまつた。老いた師が一人、昔にかはらぬ愛をもつてゐてくださる。尋常四年のころ受持であつた先生である。長い間小學の先生をして老いられた方である。

わたしはいま取りかゝつてゐる十年計畫の著述がある。これができたら先生もお喜び下さらう。(サンデー毎日、昭五)

追記

はつきり覚えてゐないが、いまのところに移る前の年の初秋に書いたものと思ふ。中に十年計畫といふ語があるし、なんだか全體の感じが、新しい生涯の首途に、過去をふりかへつてゐるといつたぐあひである。

老師——尋常四年のころの先生とあるのは、辻傳喜先生。先生はその後十二年五月十日になくなられた。私の辭書のできたのを御覽いたゞいて、御病床から大へんおよろこびのお手紙を下さつたが……。

世田ヶ谷より 一

交 友

この間、ひどい荒模様の日、頭から短衣をかぶつて、竹中繁子女史のお住ひをお訪ねした。女史の家は、私の處から南七八町、もとロシア問題研究所の大竹さんが、ロシアから歸朝して建てられたものとかで、がつしりした好ましい建築である。

はじめこの家が賣物にでたとき、私も買手の一人であつたが、一日ちがひで女史にとられてしまった。それで私の方では、近所の櫟林を借入れて、その中へ建築にかゝつて、引越してきたのであつた。

私の處の建物が、若者らの寒い研究所を思はせるなら、女史のお家は暖い母の家であらう。

辭して歸途につく。途中丘あり、林あり、あらい風が横なぐりに短衣をふくのも哀れであつた。

越してくる時、楽しみが二つあつた。一つは竹中さんと平塚さん—平塚さんのお家も近いので—この二人の婦人との交友に對するそれ、他の一つは、仔細あつ

て十年來知つてゐるこの近所の農家との親しみであつた。
そして今はそれが可能である。今年の秋は楽しい秋であるやうな気がする。

子 供

仕事に疲れて、ぼんやりしてゐる時など、いつたい自分といふものは何だらうと考へてみることもある。シュリー・プリュードムといふ人の詩に、

無限にうちひしがれ

望みもなくひれ伏して

無氣味なる沈黙のうちに

解きがたき宇宙をおもふ

額は重く胸は裂かれ

知る事多ければ悲しみいやまさり

最後の殿堂の階段に

ひざまづきてなほも泣く

とある。

「知ること多ければ悲しみいやまさり」といふ境地は、まこと救ひなきものではない。
ある。

さもあらばあれ、近頃小さな子供達が、林の中で私を待つてゐる。彼等は私と遊ぶことが面白いらしい。木片れ、紙ぎれ、虫、葉、何でもつまみあげては、さも珍品かのやうに私にみせる赤ん坊もある。

私はこんな天使と、うつかり時を送ることがある。

おゝ、いゝ子達！ かはいゝ子達！ かういふ子達をみると、何とまた自由への、否、幸福への希望がわいてくることか。(婦女新聞、昭六・一〇)

追記

平塚さんの成城のお家は少し遠いので、たうとうお訪ねが出来なかつた。それから一度もお目にかゝれないのであるが、いつであつたか、自然に再會の機会があらうとお手紙下さ

つたことがある。

この後は訪問客もすつかり断つて引籠つてしまつたので、竹中さんにも辭書ができるまでおめにかゝる機会がなかつた。

巡 禮

四月九日夜、巡禮の話がでたが、十日朝になつて突然具體化した。

私のつもりは、費用のこともあり、また主人を留守居させて私一人が旅でもないと、夢にしてしまつてゐたが、主人の方からすゝめてくれるので、話が急にまとまつてきたのである。私は秋頃と思つてゐたが、それではこの月末に立たうかと思ふ。

まだ手足の痺れは直らず、足も歩けない。輕部宅までさへ危ぶまれるほど、足元がもつれる。しかし、すつかり仕度をして、草鞋を穿いてしまへば、病氣も却

つてよくなるかも知れない。

もし費用が許せば何處かへ轉地でもといふところかも知れないが、そんなぜいたくはゆるされないし、それに轉地などいふ気分は私とはそぐはぬものがある。

四國巡禮の曾ての經驗は（それからもう今年で十五六年になるが）未だに楽しい思ひ出である。あの最下層の放浪の世界こそ、私にもつとも適當な旅行圏である。

あそこへ行つたら、私の病氣も、普通の人が轉地したと同様の好結果をもたらすであらうと信じる。

前のときは途中から七十三翁といつしよになつたが、こんどは一人旅と決心してゐる。らいてうさんを誘はうかとも思ふが。

さて愈々行くとなれば、今から二十日あまりの間に、準備をととのへねばならぬ。まづ服装——これには、笠、杖、負衣その他、輕部のおなみさんに相談して見よう。

旅費としては、一ヶ月二十圓支給すると主人の申渡しである。すると一日七十錢ほどになるから、たいてい大丈夫だと思ふ。(日記、昭九・四)

追記

昭和八年の秋の末ごろから脚氣が嵩進して、下半身の麻痺を感じるやうになつたが、夫へは負擔をかけるのが氣の毒でかくしてゐた。あるとき、その歸宅を迎へようとして足がもつれ、寢臺から落ち、階段口まで這つて行つて氣を失つてしまつた。

この前後の三ヶ月ばかりは後から考へると非常に危険な状態で、死と直面してゐたといへる。師範學校時代に一度脚氣衝心をして、醫師から絶望の宣告をうけたことがあるが、それとよく似た症状であつた。あるときもこのときも、よく助かつたと思ふ。

それから神経衰弱を發して仕事が出来なくなつた。色々考へて巡禮を思ひたつたのである。これはそのときの手記である。

そこで、いつも世話になつてゐる輕部さんに相談して、いろいろ旅装上の用意を整へて貰つたが、やはり病氣のせい、急に自信がなくなつて、實行ができなかつた。しかし、これが機縁となつて、次第に健康と頭腦をとりもどすことができたのは、一たびは眞劍に決心したからであらうと思ふ。

落葉と手紙

小田急の經堂から女の足で三十分とはかゝるまいと思はれる。こゝに片隅めく森がある。朝も夕も落葉の此頃である。

近所に和光學園といふ學校ができたのはもう一昨年になるかしら。この學校は例の成城學園から分離したものであるといふ。村の人達は、かういふ僅か一個の學校にも多少の希望をかけたやうに思はれた。しかし、できしてみると、別に賑やかにもならず、従つて地價も上らない。長い目で見てゐることだといまは誰もが斷念し、相かはらず稻を刈り、麥を蒔いて暮らしてゐる。

かゝる凡そ佗びしい人事に取巻かれながら、しかもほとんどそれらに懸け離れて私の森がある。朝は朝日が、夕は夕日が美しい。

ある朝、思ひがけなく音立て、嵐が過ぎる。杉が折れる。笹がかれる。

櫟の枯枝は春先の若芽をふくところに最も目立つてくるから、近所の人長い竿をもつてそれを取りにくるものがある。

このごろのやうな落葉は、これは焚付にはなるが、あまり多いのに困つて、誰も拾ひに来ない。

けれど、こんなに降り積んだおかげで、誰も来ない私の家を時たま訪れる猫、雀といったやうな小さな生物の足音は、たいていは紛れることがない。

雀の足音は軽く穏やかで、切れ切れに聞えてくる。隣のおてふといふ猫は、音が重いので、すぐにそれと気づくことができる。

私の二階の書齋は、久しく整理をしないので、亂雑に積み重ねた新聞雑誌や原稿の反古などの山が崩れて、こゝも落葉とえらぶところはない。

ある日、ひとりで整理してゐると、書き損じの手紙の反古が澤山でてきた。同じ文句の書きさしが幾枚もあつて、中には故郷への便りなどもあつた。屑屋にさへかういふ反古は渡したくない。

一番多いのは、御病床の生田先生へ差上げる手紙の反古で、これが同じ文句を幾枚もくりかへし、くりかへし、書いてゐる。

実際に先生のお手許へ差上げた手紙は、この反古から見たいして洗練されたものでもなく、むしろ改悪されたものであつたらう。さう思ふと、いまさら恥づかしい。

この手紙は落葉が散りそめた日の午後認めたと記憶してゐる。その前日、年に一二度、風來坊のやうに叩き廻つてくるある友たちから、先生の御病状をうかゞひ、心配やら、苦痛やらで、ゐても立つてもゐられぬ氣持であつた。

「一頃よりも御快復のやうに承はりますが」と、私の手紙は、心苦しい文句で始まつてゐる。「……心にもない御無沙汰に打過ぎてゐますけれど、一日とてもお忘れ申上げる日はございません」といふのは、「その後何の仕事もしてゐませんので先生に申しわけもなくまたおもはゆく」思はれ、「しかも私を世の中へお出し下さつたことで幾度かお名前を辱しめ」たことをわびてなく。

この四五年來の仕事の一部でもでかして、せめても御報恩の一つとしたいのに何と力にあまることよと書くと、もはやこゝで手紙は完全に反古となり、「この上は是非とも唯一つ長生きをしていたゞきたい」と懇願を重ねても、かういふ言葉は先生に向つて直接申しあぐべきでないことはもちろんであらう。

私の手紙は幾度書いても反古になり、私だけの創作と涙に終つてゐるのはいふまでもない。

先生の批評家としての偉大は、世の定評にゆづりたいと思ふ。私などの義務はそれを傷けないことにあらう。この心の故にのみ、御病氣がしんから怨まれ、風の便りにでもお噂をうかがうと、頼りなさが沁々どこみあげる氣持である。この氣持をどこへもつて行けよう。

けふも朝から落葉がふりやまぬ。私の書齋は決して暗いとのみはいへない。目的に向つて急いでゐるからである。たゞこのことをひとこと御病床の先生に傳へたい。(手記、昭和一〇・一一)

追記

これはある新聞に投稿して、そのまゝかへされてきたものである。先生は翌十一年一月十一日遂に御長逝になつた。鎌倉長谷の先生の墓前に額ける日はいつくるであらう。

世田ヶ谷より二

小 閑

人名辭書をまとめて、本屋との交渉もすみ、いま組版の校正中である。小閑といふわけには行かないけれど、こゝのところ暫らく暑中でもあり、校正ををへると、臺所、掃除、洗濯等にこゝろゆくまで残りの時間を振りむけてゐる。

畑から茄子、胡瓜、トマト、キャベツ等を籠にいつぱいとつてくる。

みがきたてた臺所で、念を入れてきりきざむ、味をつける、器にもるといふや

うなことをしてゐると、腦の中が單純化し、氣持がさつぱりとする。

過勞のため心臓をいためてゐたのが、近頃のいくらか閑な生活で、だんだん恢復して行くやうである。(婦女新聞、昭一・八)

追記

この年の秋やうやく辭書ができたのであつた。小閑などゝ呑氣らしいことを書いてゐるけれども、前の年のくれ、夫はつとめてゐる會社が解散になつて失職し、仕事の困難の上にまた生活不安が重なつた。友人達の後援の話があつたのはこの時であつた。私にどうしてそれを否むことができたらう。

世田ヶ谷より三

断 章

本誌(○婦女新聞)連載の藤田たき氏の時評は、近來の名時評ではなかつたらうか。

そしてそれは、思索よりはむしろ教養、あるひは態度の好ましきである。私はそれを強く感じた。

態度の好ましきといへば、相馬黒光氏の書かれるものにもそれを感じる。ただし、氏にあつては、その教養乃至信念を撥無した荒々しい野性の露出が妙に心を惹く。「黙移」はまだ讀む機會がないが、ぜひ讀みたいと思つてゐるものゝ一つである。

私は女性の著作は出來得る限り蒐めることにしてゐる。費用がないので、新刊では買へないが、古本屋に出るのを待つてゐる。女の本だけは一部残らず集めて正確な解題を作りたい。

しかし實をいふと、かういふことは、私のやうな文なしのすることではないかも知れない。お金と時間に餘裕のある人で、書籍を愛し、思想を愛し、同性乃至社會を愛する人であれば、この仕事は決して面白くない仕事ではない筈である。書籍のみでなく、新聞雑誌の主要なる論文作品の調査分類にまで及べばもつと意

義があらう。

花園歌子氏は夙くから女性文化研究資料の蒐集に盡くされてゐるといふ。かつて白木屋でその一部の展覧賣立を催されたときの目録を見ると、氏の蒐集は、むしろ女性の著作のみに限らないで、頗る廣汎に亙るものであるが、いづれかといへば、精神文化の方面には薄く、明治時代の風俗文化に中心があるのではないかと思ふ。

年少學徒

私は昨年末、未知の人から二つの手紙を受取つた。

その一つは、府立第二高女を出て、更に奈良女高師に入學の準備中であるといふ人からのもの。その奈良を選んだことには理由がある。

小學五年の頃から女性列傳の編纂を志し、昭和六年女學校入學後は、殆ど毎日放課後の時間を利用して圖書室にいりびたり、既刊の人名辭書や、傳記類の中から、女性を抜き出し、家にあつては新聞記事の切抜に専念して來たが、それらを纏めるにはなほ史學の素養が第一であることを痛感し、それには、古代文化の榮えた、特に女帝の多くゐました平安京奈良の地にある女高師を選んだといふのである。

先頃私の著を御紹介して下さつた徳富先生の日々たよりを讀んで、最早やこんな本が出ては自分の入學の目的もなくなつたけれど、それにしても、これまで蒐集を續けて來た數々の氣持は放棄するに忍びないので、何れ増補の折にはぜひ手傳ひたいとのことであつた。

昭和六年といへば、丁度私が同じ道に志したところである。この年少學徒に對して私は心からなる敬意を表さないではゐられなかつた。

青年教師

もう一つの手紙、それは某縣高女の女先生からのもので、事柄はやはり女性史

に關する感想である。

その一節、

「女學校用の國史教科書は、中學校の抄本に過ぎず、唯お義理的に烈婦といふものを章末に附記してある程度で、現在教科書中に入れられてある女性に關する記事は約五十項でございしますが、而もすべて偶然的な取扱ひ方で、史學の持つ教育的目的は女子には何等關係のない様な結果に陥つてしまひますのでございませぬ。何時の時代にも國民の半分を占めて居ります女性の残した史的事項のない筈はございませぬ。將來多い生徒に舊態依然たる女性史無視の態度を以て教授者が對するといふことは出來ないわけでございます。どうしても女性史といふものゝ必要がひし／＼と迫つてまゐりますのでございませぬ。」

この一節は、今の女學校の國史教育の實際と、若いそして進歩的な先生の悩みとを、最もよく語つてゐるのであらう。

二度目の同じ人からの來信には、中等教科書の國定問題に關して、女學校國史

教科書について意見を發表したところ、縣學務課から、標準教科書編纂につき、内容、程度、分量及び意見の申告を命ぜられたとあり、

「中等學校の國定になりさうな公民、修身、國史の三科が、この際慎重に考へられなくては、將來固着してしまひますからの問題になりましては、悔いても及ばない結果になりはしまいかと案じられて居ります。」

と、附言してあつた。

婦人界三十五年

……婦女新聞については、讀者が何より御承知のことであるから、私が贅言する要はないが、たゞ一ついひたいことは、これは、新聞としての効用を當面的に果してゐる外に、すでにわが婦人史にとつて、明治中期以後の第一資料を提供してゐるといふ點である。

婦女新聞の創刊は明治三十三年であるから、三十四年に五百餘號で廢刊となつ

た「女學雜誌」に續くのである。女學雜誌は十八年の創刊、その前身の「女學新誌」は十七年の創刊で、これらを通覧すれば、婦人界の外面的な發達の概念だけは容易に得られるであらう。

「婦人界三十五年」(福島四郎著、菊判一二二二頁)は、著者の婦人界に貢獻せられた尊い金字塔であり、また前述の資料の意味での婦女新聞三十五年の縮圖でもある。卷末の年表なども、後の研究者を益するものであらう。

婦人年鑑

私の世田ケ谷よりは、今度は讀書のことばかりで、あまり己れの好みに阿ね過ぎたと思はれる。讀者よ、どうか許して下さい。そして最後にもう一つ、それは東京聯合婦人會から出される「婦人年鑑」について。

婦人年鑑は、前にも全然ないわけではなかつた。私がまだ國にゐた頃見たことを覚えてゐるから、多分大正九年前後ではなかつたかと思ふ。その後十二年には

大阪毎日新聞社から「婦人寶鑑」が出たが、ともに永續しなかつたらしい。

いま聯合婦人會の年鑑が、些の不安なく、その永續性を確立しつつあることは注目すべきであらう。

それとともに、内容も重版ごとに整備されて來てゐる。たゞ、婦人録の收載數が僅々千數百名に過ぎない事實は、これが若し現在の婦人界の實勢力を反映してゐるものであるとすれば、色々の意味で考へさせられるものがあらう。

登載者には、それぞれ評價の基準があることであらうが、今少し開拓増加の餘地はあるのではないかとも思ふ。

とまれ、編輯者のたえざる創意と努力に敬意を表しなければならぬ。(婦女新聞、昭一二・五)

世田ケ谷より 四

夫婦鴉

去年の冬は、私の家の東面の林が伐られて開墾され、折柄建築中の東京發聲映畫の撮影所の屋根が近くに見えるやうになつたが、そのため永年のお友だちだつた夫婦鴉が何處かへ行つてしまつた。私の家も、もう置き忘られた自然の中の一軒家ではなくなつた。

春には右の撮影所の落成祝があつて、「來賓の方に申上ます、どうぞお順にお辨當を受取つて下さいませ」……などといつてゐる擴聲器の聲を聞いたが、このころでは、よく軍歌や萬歳の聲がきかれるのである。

しかし、私といふものは、まだトーキー映畫すら知らない。

自叙傳

吉岡彌生女史の「來るものゝ爲に」を読む。今假りに矢島楫子、下田歌子をつ

ぐ實踐派の巨人を求むるならば、女史はたしかにその人であらう。

本書は表題の外、女性と母性、女醫誕生五十年、時事雜感、わが自叙傳の都合五部から成つてゐるが、何れを見ても、力の福音書である。それはすべて女史の貴重な體驗の聲でないものはなく、こゝには空理を見出すことができない。

「自叙傳」は感銘が深かつた。わが國には婦人の自叙傳が殆どなく、現存の人では鳩山春子女史のが昭和四年に出てゐるくらゐだらう。自叙傳はもつと書かれてよいと思ふ。

女史は「文學的叙述の筆をゆるされてゐない私」など書いてゐられるが、なかなか、情意至つた滋味ある文章である。

琴子さん

今でこそ私は人にあふことは殆どないが、こちらへ越してくるまでは、かならずしもさうではなかつた。その頃、山本さん御夫婦はよく宅に見えられた。夫人

はもと並木琴子さんといつて、山本氏に嫁がれる前からの知合ひで、その結婚に ついても相談をうけたのであつた。

こちらへ越してからは、ついお便りもなくなつてゐたが、突然の山本氏の來信で琴子さんが一昨年四月になくなられ、その半生の生活を主題としたものをごんと松田解子さんが、「女性線」といふ書物にして出されるので、讀んで欲しいとのことであつた。

山本さんもその後は早大の講師を退いて幾艱難の道を辿られたらしく、その途中で妻を死なせたことは心残りであると、感慨を洩らされてゐる。私は當時一生の仕事として女性史を書く決心を固めたときで、新婚の琴子さんにも、これから一緒にはじめようではないかと、勧めたことであつた。

琴子さんも私の言葉に肯いて、是非やりますといつてゐられたので、折にふれては思ひ出し氣にかけてゐたのであつたが……。

謹んで冥福を祈る。

「女性線」では作者の松田解子さんが、「この本に盛つたものは彼女の打ちこんだ事業、家庭、彼女のかかげた理想、これらのものゝ間に横はる矛盾に、彼女がどのやうに處し且つ闘つて行つたかに關してゐる」といつてゐる。

だいたい、私がこゝに引籠つて、琴子さんとの便りもなくなつた頃からの生活が寫されて、私には私なりによく通ずるものがある。女性史研究の方も、最後まで捨てようとせられなかつたことが、この小説中に見えてゐて殊に有難いものと思はれた。

讀 書 法

私の父は哲次郎圓了兩井上氏の愛讀者であつたが、非常に讀書を娛しむ質で、一冊を讀むのに、一月位かゝつた。遺傳であらうか、私もかなり遅讀である。それで、時間の餘裕がつかない場合は、最初から手を出さない習慣である。

私の讀書法が、父と異つてゐる點は、父が娛しんで讀むに對して、私は寧ろ苦

しんで讀むにある。人生の経験に乏しい若いものは、苦讀でもしなければ、書中の眞理を十分掴むことができない。私は、本の餘白に、私の讀書上の苦闘を物語るあらゆる批評、検討の句を、書込み書込み讀んだ。

ある時、その傳で、父の大切な本にまで書入をして仕舞つた。父から叱られることゝ思つてゐたが、あの謹嚴な父が何ともいはなかつたから、思ひ出す毎にまだまだ落ちつかない氣持である。

今では、やゝ餘裕ある讀方に變つて來た。年のせいも、父の領域にだんだん近づきつゝあるやうな氣がする。

日 記

父は母を娶つて後の四十年、死の前日まで缺かさずに日記をつけてゐた。丁寧に半紙を綴じたもので、無論墨書である、書は宮小路氏を好み、その日記は習字の手本位にはなるが、内容は日々の雜事を記したにとどまり、處々に挿んだ漢詩

和歌の外は、心中の消息を窺ふべきものがない。

父が死んだとき、私は歸郷して父の日記を讀んだ。その節私の舊い日記をも探し出したので、數冊もつて來た。題して、少女集、十三歳集、四角集、落葉日誌といふ。

ふるさと

そこはかと

美しき山はびこりて

焰の如き少女なりしか

家 計 簿

私は家計簿はめつたにつけなが、昭和三四年のものを、日記の附録に書込んでゐるのがある。それによると、當時の月々のかゝりは、百圓見當である。私の家は二人きりの生活で、最近は、そのころの家賃額に相當する月三十圓の豫算で

通してゐる。

三十圓には書籍費を見込まないだけで、食費、住居費、紙インク、薬代その他すべてを含んでゐるが、切りつめた生活であるから一般の参考にはなるまい。

前の百圓の家計では、交際費が最も大きい。外にでかけることは、例によつて主人の外はなかつたのであるが、來客のためには、普通の飲物お菓子類は缺かさなかつたらしい。八百屋、魚屋、肉屋の拂ひが相當の額に上つてゐるのは、たしかに必要以上に押しつけられた嫌がある。

こちらへ越してからは、理由を述べて、できるだけ訪客を絶ち、お茶なども一切出さぬことにきめ、八百屋をはじめ御用聞といふものを廢した。

月に一回、米醬油の類を買入れ、野菜を隣の地主さんから井戸端に届けて貰つたり、またこちらからその畑のものを勝手にとらせて貰つたりする外は、隔日毎にお豆腐やさんが配達して呉れるばかりである。

地主さんは、私が出京當時、守屋女史のお世話で一時寄寓した關係で、いまに

何彼と便宜を得てゐるわけである。

世間外れた生活であるから、これを以て他を律する等の不遜な考は毛頭ない。前のやうな生活は經濟的に許されないし、時間の自由も得られない。餘命幾何もない身の、先を急がねばならないといふ、餘儀ない立場から、こんなことになつた。

夜 業

真夜中の

扉のそとに廣がりて

夜陰の庭はしんしんと云ふ

出 征

前の畑で働いてゐられた人が出征されるので、夫は見送りに行つた。森つづきの家である。残されたものは女家族のみといふ。

朝の五時はまだ暗い。國旗をたて、私も暫し佇んでお送りした。

麥の芽は未だそだたず枯れがての

武藏大野を出で立たすかも

勅なればいともかしこし冬去りて

春きたりせば歸りませ君 (婦女新聞、昭二二・一二)

追記

この人遂に歸らず、一年後北支の病舎で逝かれた。騎兵伍長であつた。

世田ヶ谷より五

胚芽米

日本婦人團體聯盟で、白米食廢止の運動が起されたのは時宜を得たものであら

う。私は個人的にも賛成である。といふのは、私はいつも夏秋の候に脚氣にかゝるので、一昨年暮、らいてうさんにすゝめられて從來の精白米をよして胚芽米にかへたところ、昨年は例年の麻痺感を覺えないで過すことができ、實はてきめんの効果に驚いてゐるのである。

ずつと前にも一度七分搗米を食べてみたことがあるが、その時は何だか落ちつきがわるく、永續できなかつたが、こんどの試みでは、はじめから落ちつきがよく、白米の重たい感じがなく、今ではもう白米を食べようとは思はない。

これは多分個人の味覺そのほかの諸條件によつて異なるのであらうが、胚芽米は決して非大衆性のものではないやうに思はれる。聯盟がよい題目を選んだことを喜ぶ。

女性史

新妻伊都子氏のおたよりによると、世界女性史エンサイクロペヂヤの日本部の

編纂が完了したといふ。また、全國高等女學校長協會の日本女性文化史も、近く第一巻が出るといふ。

この兩者は、單に女性史あるひは文化史の編纂といふ以外に、世界女性史の一部としての國際的意義や、廣く教育的意義をもつところに、一層の期待がかけられる。

二千六百年の記念事業として同協會で、女子教育史の編纂も提案せられてゐるし、また記念事業であるかどうかは聞洩らしたが、櫻蔭會の會史も、女子教育史の實質を具備して、編纂されるといはれる。

また通史ではないが、吉岡彌生女史詳傳の編まれることも、一般の女性史に寄與することが少くあるまい。

下田先生

下田先生は「母の思ひ出」(櫻蔭會會報昨年十月)の中に、母上の御終焉につい

て、「大正九年四月八日から十四日までは檀那寺の戒善寺といふに善導忌があつてそれに詣るつもりで居たのでしたが、四月十日に亡くなり、十一日には遺骨となつて行きました。實に人の命といふものは分らぬものであります。」とかいてゐられる。私は先生の御訃音に接して、このことを思ひうかべ、暫し茫然たるものがあつた。

その時私は先生へ差上げる手紙を認めてゐた。個人的なことになるが、私は近く女性史を上梓するについて、一言江湖への紹介辭を賜はらんことを懇請したところ、先生は折返し貴重な御言葉をおめぐみになつた。

それは二十三日の日附の代筆であつた。私は御健康にお障りでもあるのではないかとお案じしたが、次の瞬間には、新聞で御逝去のことを知らねばならなかつたのである。

先生から賜はつたお言葉は、私に下さつたのではなく、それはたまたま私のしてゐる仕事の性質によつて鞭撻を賜はつたものと考へるが、その意味で拜するな

らば、先生が、女性乃至女子教育についての愛情を、御臨終まで放たれなかつたことも偲ばれて尊い。つゝしんで御冥福を祈りあげる。(婦女新聞、昭一三・三)

追記

この頃第一巻ができた。徳富先生のところへ原稿を送つて序文を乞ひ、その原稿が返つてきたとき(つとめを果して)、ほろりとなつたことも覚えてゐる。

捨 身

高群さんの家なら、大きい竹藪の中に百姓家が二軒ある。其の直ぐ先だと教へられて来たが、氣紛れにうねり、戻り、岐れ、のみならず其の間々に雑木林や藪を點綴し、桑畑や野菜畠を配した舊い武藏野の道は、遺憾なく遠來の訪問者を弄び、途方に暮れさせる。

岐路に来て、前方に散在する家々の何れとも見當がつかぬ儘に思ひ切つて道を

右に採つて入り込むと、其處はありとあらゆる庭樹を仕立てゝゐる植木師の住居で、家の中から「庭中の道を眞つ直に行つて突き當りだ。」と教へて呉れた。云はれた通りに行くと、果して疎らな林の中に二階建の灰白色の木造洋風建築が姿を現はしたが、同時に道は絶え、私の行手には茂り放題に茂つた雑草と、疎らな立木にまぢつて、伐り倒されたらしい松や樺の横はつた荒涼たる景色が立ち塞つた。呆然と佇んでゐるうちにいつか小さい雨が降り出した。——勇を鼓して草の海に踏み込む。鹿寨の様な伐木を跨ぎ越す。草の實が膝のあたりに纏ひつく。露に濡れる。——右は突井戸が見へて裏手らしいので、壁に沿つて左手へ廻る。窓は固く閉ざされてゐる。

玄關に立つて暫く息を静めた。ベルを押す。——案内を乞ふ。——一度。二度。三度。——訝しい程の静けさである。ふと氣がつくと色の褪せた紙片がピンで留めてある。「面會謝絶」。

私は玄關を離れて歸りかけたが、五六歩行つて立停まり、も一度此の建物を眺

めた。松と櫟の疎らかな林。家を取り圍んで波打つてゐる一面の雜草。閉ざされた白い窓。字の消えかけた一枚の紙片。その全てをほかして霏々として降りそぐ絹の様なうそ寒い時雨の色。——「アツシヤー家」。

私は踵を返すともう一度此の「アツシヤー家」のドアの前に立つた。

何か物音がしたと思ふと、それは意外に早く近づいて来て、眼の前のドアが開いた。

少女の様に瘦身で小柄な高群さんのハーフコートを羽織つた無造作な姿が眼の前にあつた。と同時に私は沈痛と形容したい高群さんの表情に何か痛々しさを感じ、忽ち心なき闖入を後悔した。そして後悔し乍ら結局すゝめられる儘に取つたきの應接室に入つた。

窓、椅子、テーブル——全てが白布の裝飾より何も無い此の部屋は、外界の一切と絶つて、畢世の仕事に精進する高群さんの生活を、形而下的にも形而上的にも最も良く具現してゐると私には思はれた。

「送つて戴く雑誌は毎月拜見して居ります。」

高群さんの聲は、低く弱々しい。飾り氣と云ふものゝまるで無い聲である。

そして氏は同人の名を擧げてそれらの人達の消息を訊き、郷里にゐた頃の恵まれない生活の事などを少し語つた。

「今でも決して樂ではありません。近所にゐらつしやる竹中繁子さん、平塚雷鳥さん達、それからいろいろの方から何かと御援助を受けてゐます。研究材料を蒐めるのに主人にも随分迷惑をかけました。——第一部が約十年、私の計畫は第五部まで有るのです。昨今は夜も四時間程しか眠りません。今やつてゐるのは招婿婚の研究です。」

「セウセイコンとは？」と私は言葉を挿んだ。

「婿を招く婚と書くのです。鎌倉時代以前には嫁入りと云ふ言葉は無いのです。男の家へ女が行くのでなく、女の家へ男が婿として呼び入れられる譯です。」

それから氏の母系の重視に就て話し出した。熱心な口調の途切れるのを待つて

私は、氏がこんな大仕事を始めるに到つた動機を訊きたいと云つた。

「大正から昭和の初期に一頃婦人論が流行し、私もその流れに乗つて少しばかり書いたり喋つたりしましたが、そのうちに、論じてゐる自分が、何も根據となる知識を持たずに、空に論じてゐる事に氣づいたのです。」

さり氣なく云はれた言葉であつたが、何かしらそれは自他共に貫く痛烈な響があつた。

氏はそれから、先づ足下の日本女性の地位を歴史的に知る事を思ひ立つた。手當り次第に読み且つ探した。

併しいづれも満足させるものがなかつた。

其處から氏の困難な業績の道が始まつたのである。

氏は暫く言葉を切つて己の歩んで來た道を振り返るものゝ如くだつたが聽て眸を擧げると、「このあひだ、或雑誌社から、政府の文化政策に關する忌憚なき直言を訊きたいと云つて來ました。」と云つた。

「何と答へられましたか。」

「あなたはどうお答へになります。」

間髪を容れない反問にたぢたぢとなり乍ら、私はどうしたつて今後の我々から科學的な物の見方と云ふものを取り上げる事は出來ない。しかしそれが日本精神と云ふものと抵觸すると云ふ杞憂が爲政者にあるのでは無からうか。その何れをも捨てる事が出來ないとすれば政府の文化政策と云ふものは日本精神を無説明の儘押しつける事でなく、それが科學的な検討に堪へて存立し得るものである事を若い人達に納得させる様な行き方を採るべきであらう、と云ふ様な事を云つた。

「さうですね。」氏は、沈んだ、併し確信的な調子で云つた。「私も此の研究に當つては科學的な物の見方より外に信賴すべき方法は無いと思つてゐます。けれども此の一方に斯うして永い間日本民族がしつかりと國家を守り続け、發展して來た事はやはり其の中心となるものがあつたからだと思ひます。——それに就て私は或る人から聞いた話を思ひ出します。それは今來朝中のヒットラー・ユーゲン

トにナチス精神とは何かと尋ねると皆はつきりと答へるが、日本の青年に日本精神とは何かと訊いた場合明瞭に答へ得る者は殆んど無い、と云ふ話です。——こころには、彼我の事情の相違などもあるでせうが、いろいろ考へさせるものもあるでせう。」

……二時間も経つたらうか、私は文字通り、氏に取つては一刻千金の時をあまり多く奪ひ過ぎたのに気がついて、立ち上つた。氏は「私の家ではお客様にはお茶を上げない事になつてゐますからどうか不悪」と謝られ、私が云ふべき言葉を逆にとつて、

「お蔭で大變面白うございました。」と弱々しい微笑を餞けにされた。

私は入つた時とは別な細い徑を道路の方へと辿り乍ら、もう一度此の林の中に置忘られた様な家を振返つた。此のアツシヤー家にも似た、併し烈々たる一個の探究精神がその中であつて捨身の光芒を放つてゐる家を。(日本談義、昭一四・一)

追記

日本談義といふ郷里の雑誌の同人K文學士の書かれたものを借用した。この年には數十年來とかいはれた大風があつて、健康の關係から樺を切つた後であつたので、孤立した花柏が十數本、地上一丈ぐらゐ、直径尺ちかくもあるところから折れ飛んだ。箒のやうにひよろひよろした栗の木が、屋根の一角を掃きたてゝ瓦を落した。

世田ヶ谷より 六

同 行

私は二人の病友をもつてゐる。一人は岡山に、肺をやむ青年で、それを妹が工場に勤めていたはり、朗かな愛の生活を營んでゐる。もう十年春夏秋冬のたよりを怠らないが、いつも正しく生き、たえず境遇を克服して進んでゐる。この孤兒の兄妹の健氣さにうたれる。

他の一人は、中野の淨風園にある鷹野さんである。私は最初、「お遍路」をこの友には贈りかねてゐた。喜んで読んで貰へると思つたが、病勢に障つてはと、遠慮したのである。しかし、廣告を見て、読みたいといふことなので、安心して送つた。

鷹野さんは、わざわざ病床から、長い讀後感を寄せられた。私は氏の精進の心境を有難いと思つた。

その末尾には、

「あなたが、らいてう様と、お遍路の計畫をなさいましたことを知り、ほほゑましいやうなお二人のお姿を、描いたりいたしました。もしも其の中に私が加へられたら。何時かは、私のやうな者にもいのち許されて、道を歩くことが出来ますやうになりましたら……。こんなことも思ひ描かれてよろしいでせうか。」とも書いてあつた。

お遍路は、たゞに四國を廻るのみではない。人生是遍路の生き方である。それ

は、精進の生活であり、不退轉の行である。

これらの同行者を、與へられてゐることは、心からの感謝である。

鐘

夜の御飯がすみ、夕刊をよんだり、手紙などを書いてから、またいつもの仕事に歸り、やゝ調べものに倦んだ頃、勝光院の鐘が鳴る。その鐘をきくのが、たのしみである。

豪徳寺の鐘も、きこえてくる。なかなかよい音である。

勝光院は、世田ヶ谷城主吉良氏の菩提寺であるが、私には、女訓書として名高い「北條幻庵覺書」のゆかりでなつかしい。

北條幻庵覺書は、北條氏康の女がこゝの吉良氏朝に嫁いたとき、氏康の叔父長綱が書いてやつた心得書である。豪徳寺は、井伊直弼墓で名高いが、こゝには女醫の先驅者高橋瑞子の彰功碑がある。

鐘をきゝながら、細川澗松氏著「街の自然愛好者」の中に書かれてゐる調布高女の精進の鐘のことを思ふ。

この鐘は著者の夫人、副校長の武子さんの立願で出来たもので、朝五時の曉起の鐘、午後九時の反省の鐘を自ら撞き、その名の如く精進の範を示してゐられるといふ。

美しいことである。

ほろ市

世田ヶ谷のポロ市は、歴史的に名高い。秀吉の小田原征伐の時、世田ヶ谷城主吉良氏は北條軍に参じたわけであるが、草鞋用のポロを得る便法として、百姓に命じて此所にこの市を開かせたのが、名稱の起りといふ。

私は出京當時——今から約二十年前のポロ市を見たことがある。いまの竹中さんの近所から、三軒茶屋にかけて兩側いつばいに、いろいろなものを持出して賣

つてゐた。

つぎはぎ用のポロ切れの山などから、およそ此邊の農家の日常品の屑物が紛然雜然と陳列されてゐたものである。古ゴザを二つに折つて、その上に五つ六つの小ぎれをひろげてゐたお婆さんから、古片袖のほどいてないのを買つて行くお上さんもあつた。

私の寄宿してゐた家の女中さんなどは、年が明けたらお嫁に行くといふので、こまごまとした所帶道具を一通り揃へたものである。

このポロ市は、師走の十五六日と正月の十五六日の兩度あるが、今は大半何處の夜店にも出るやうな、あつらへものゝ商品にかはつて、昔ほどには人出もないさうである。昔は徹底的な廢物利用であつたが、今は普通の縁日商買と殆ど變りがないといふ。

私は今年十錢の柿の木を二本買つてもらつて、日當りのよい處をえらんで植ゑた。

これに實がなる頃は、私の仕事もなんとか恰好がつくであらうと、さうやかな希望をかけたわけである。(婦女新聞、昭一四・一)

故郷によせて 一

賀状のこと

新年で一番うれしいことは賀状をよむことであらう。中には賀状だけの年一回の便りしかないものもあつて、さういふ便りをとにかく年の始めに取りかはすといふことはなつかしいことに違ひない。

私などのやうに二十年近くも、他郷におちつきのない生活をしてゐるものにとつては、賀状は、儀禮としても、此上なく調法なものである。思ひもよらぬ人からや未知の人からの賀状を貰ふこともうれしいが、取りわけ舊い辱知の便りはあ

りがたい。

私は少女時代から賀状だけは缺かさず出してゐる。さびしいのは、年々、幾らかづゝ失つて行くことである。鬼籍に入る人もあり、行方不明のものもある。

さうでなくとも、何年かつづけて返事が貰へない時には、自然、そのどちらかであらうと考へて、賀状を差出すことを控へるのである。

遠く他郷にゐて、たまに國の者が見えると、氣になるまゝに尋ねてみる。すると、知らないと言へられる場合は仕方がないが、時には、亡くなられたといふ返事を得る。

くわしく訊きたゞすと、確信ありげに、何時々々の頃などゝ話す。しかし、これがまことに當てにならないといふのは、私はこんな人の話で幾人かの恩人や知人を鬼籍に送つてゐた例もあるのである。

賀状の喜びは、私のやうに籠居生活を送つてゐるものにとつては、子供のお年玉以上で、これによつて懐舊の情を展べ、知音を感謝するのである。

福田先生

福田令壽先生は、私の女學校時代の恩師である。すなはち先生は、その頃の熊本女學校（後の大江高女）の校長先生であられた。

女子師範を退學して、長い間、脚氣を養つてゐた私は、やうやく健康を取返すと、ある寒い日、里餘の道を川尻まで歩いて、増永ついで子さんといふ小學時代の級友を訪ねた。増永さんが行つてゐる熊本女學校に、自分のやうなものでも途中からは入れるだらうかといふことを訊くためである。

その結果、私は福田校長先生に長い手紙を差上げた。先生は、その前に私の父が小學校長をしてゐた下益城郡當尾村の隣村豊福の名家の出であられ、お名前だけは早くから知つてゐた。

「私の手紙には火がついてゐる云々」と、私は處女詩集に書いてゐるが、まあそんな熱心な手紙が功を奏したのか、型通りの編入試験を受けて、四年に入學することが出来た。

私は其處で良い生徒であつたかどうかは知らないが、先生と學校とは今も尊敬と、感謝を忘れてゐない。

福田先生は、ダンテの神曲を修身のテキストとしてお用ひになつたが、この一事でも分るやうに、先生は新しい生活の精神を、幼い私どもに教へて下さつた。その後私は必ずしも先生のお教へ通りには生活できなかつたけれども、自分の良心を偽はらぬだけには、どうにか今日まで迎つてきたのも、歸する處は、その當時の先生の御薫陶に俟つところが多い。

今、郷里最古の歴史と傳統をもつ熊本女學校の校風と、校長先生の御恩を思ふのである。

先生は、不肖な教へ子の私のことをも、何彼につけて心配したり、喜んだりもして下さつてゐたらしいけれど、私が賀状を差上げても、御返事を下さらない。それゆゑ、私は嘗てひとたび先生を完全に鬼籍に送つたのであるが、幸ひ先生は

御健在であられ、くり返し私はまた賀状を差上げてゐるのである。

宮崎先生

大正七年六月、四國へお遍路にでかける前の一二ヶ月、私は京町中坂の専念寺といふお寺に弟から取残されて、無一文になつたことがある。が、この無一文のことは親しい友達さへ知らなかつた筈である。私には、両親や友達に無心するよりも、同じ寺に宿を借りてゐた桶屋さんの手傳ひをして、町の臺所に御用を聞いて歩く方が氣がらくであつた。

だが、當時、一つ無心したことがある。九州日日の宮崎大太郎先生をお訊ねして、金十圓を貰つたことである。四國遍路をするについて、豊豫海峽を渡る往復の船賃に當てるためである。それから、阿波の國で困つて、また宮崎先生に手紙を書いて、十圓の無心をしてゐる。其時は三十圓送つて下さつた。私が心から無心したのはこの前後二回の経験であらう。この御恩は忘れないでゐる。

宮崎先生のお宅は、専念寺から近かつたので、よくお訪ねして、奥様のおせわになつた。本が澤山あつて、勝手に持出して讀むことをお許し下さつたことも忘れられない感謝である。

私は、宮崎先生をも、例によつて鬼籍にお送りしてゐたのであるが、大畑妙子さんから御健勝のことを承はり、拙者「お遍路」を贈呈して、長い失禮のお詫を申しあげた。

とりとめもないことを書いた。兩先生とも笑つてお許し下さるであらう。(九州新聞、昭一四・一)

父の日記

私の父母は早く亡くなつてしまつたが、幸に舅姑は達者でゐてくれる。もとは一年に一ど、あるひは三年に一どは歸省してゐるが、女性史に没頭してからはも

う十年、それが出来ないでゐる。毎年家族バスを用意してくれるのを無駄にしてしまふ。

決して利己的な心持からではないが、何かと氣苦勞があつたり、病氣もしたりで、思はず釘付けになつて暮してしまつた。申譯ないことであるのは勿論であるが、かへりみて自分も寂しい。

私の父は、歸省の通知を喜んで待つてゐるうちに、俄に腦溢血でなくなつた。近く弟がボルネオ移民に隨いて家をあげてその學校に轉ずるといふので、父のかさものを一括して送つてよこしたが、中に明治二十年から昭和二年死去の前日までの四十一年間の日記があつた。

明治二十年は、父が田舎の學校につとめるやうになり、また妻を持つた年である。菊池の澁江塾に學んだ父は、當時の人並みに青雲の志に燃えてゐたのであつたが、この、かりそめに迎へられて教師となつたことが、父の一生を釘付けにしてしまつたのである。

日記をよめば、その間の消息が、私には哀れぶかく感じられ、涙をながして讀んだところが多い。

最初のほどは、毎年母と共に、新年言志、除夜述懷の詩と歌を作つてゐるが、晩年にはそれも怠りがちで、何ごともしもあきらめ、村俗に隠れきつてゐる。そのためか、村からは師父として、心から慕はれたらしいのは、せめてもの慰めであつたらうか。

風樹の嘆は、すべての子等にはまぬがれないものであらうが、私としては、一方にまだ健在な舅姑をもつてゐる。これは、嫁といふ身の上に與へられた何よりの恵みであらうと、父の日記をよんで深く教へられた。

ふるさとの春はもいかにたらちねの

親はもいかに遠くなつかし (科學知識、昭一四・六)

喜田先生

七月五日、竹内茂代博士におめにかゝつた時、喜田先生のお噂さなど申し上げおからだのをお氣遣ひしたことであつたが、それから一二時間後、夕刊で、先生御逝去のことを知つてこの上もなく驚いた。

新刊の「遍路と人生」を先生に差しあげたところ、先生は四國生れの自分にはことに興味深く一讀ができるかと喜んで下さつたが、その次に、非常に氣にかゝるお言葉がつゞいてゐた。

先年、直腸癌手術の後、起居不自由の身となつたので無理をして見ようにも出来ぬため、「一向病氣にかゝらぬ缺けた茶碗には水を一杯入れようにもはいらないから、ひびの入つた茶碗とは違つてわれる氣づかひはない」など、冗談を云ひ、事實手術以來滿四ヶ年に近い間一度も病氣らしい病氣の経験はないのであつたが

やつぱり活きた人間で、五月十日頃口内炎にかゝり、引つゞき蕁麻疹から、胃を損じ、此頃は準流動食の生活をやつてゐる。癌の前科者故、胃痛が起つたのではないかと一寸思つてもみたが、さうでも無ささうで、今日はお届けの本を見るなり早速こんなに手紙が書ける位になつてゐるから大した事では無いのだらう、安心せよ——とあつた。六月十日のおたよりであつた。

私は何となく不安で、早速お見舞狀を差しあげたことであつたが、ついこんなことになつてしまつた。

先生の御病氣は胃癌であつたさうである。

私は、もう數年お教へを頂いてゐた。私がまだ文筆で生活してゐた頃、中外日報に先生はよく美醜問題や、蝦夷の話等、女の私などにも面白く讀まれるものを含蓄ある筆致でお書きになつてゐられたのに心を惹かれたが、古代史を讀むやうになつて、はからずお教へを頂けることになつた。

先生が古代の女系説についてお洩らし下さつたものは、私には、まことにあり

がたいものであつた。この種の説は、一般の歴史家から聞くこと眞に少いものであると思ふ。

先生のお手紙の優しさ、美しさも、恐らく私はいつまでも忘れることが出来な
いであらう。私は自分が弱いので、それからおして、先生のおからだをお案じ申
し上げてゐたからでもあらうが、先生も御大患後の御様子を折にふれお洩らし下
さつた。

學者としての先生に就いて語ることは、私の資格にないことであり、また爲し
得ないことでもあるから、私は唯はじめて歴史を學ぶ者として師禮をとつた最初
の恩師として、つゝしんで御長逝を悼みまつるのみである。

私の古代篇には、先生は澤山の質問をお許し下さる筈であつた。先生は私の仕
事に御興味をおもち下さり、過分の御激勵を賜はつてゐた。まだ、海の物とも山
の物ともつかぬ後進の小事にも、成長のためにお心をお割き下さつたことは、
たまたま先生の偉大なお徳の一端であつたらうと感銘する。

先生の御逝去の日(三日)に、服部報公會の援助が決定された。先生はきつとお
喜び下さつたであらうと思ふが、これもむなし。

新聞に報ぜられたところによると、先生の御遺骸は、御郷里の四國にをさめら
れるといふ。先生は私が小著「お遍路」を差し上げたとき、御郷里が阿波の立江
町大字櫛淵とお知らせ下さつて、先生の祖母上の信心家であられたこと、よく善
根宿をなされたから、もし私が、祖母上の生きてゐられる頃行つたのであつたら
たぶんお泊めいたゞけたであらうことなどを仰せ下さつた。

櫛淵の地理は、ほど微かに思ひ出すことができる。

こんどお遍路にでかけるとき、先生のお墓に參るであらうことが、せめてもの
慰めなどと、もうこんなことを考へねば生きて行けない人間の哀れさ、はかなさ
を思ふ。(博浪沙、昭一四・八)

「キュリー夫人」

私は人にあふことが厭で、ふだん戸をしめてゐるが、このあひだ隣組との聯絡のために、玄關をあけて置いたところに東寶撮影所の人が見え、つい断りきれないで會つてしまった。

用件といふのは、映畫のある場面に、逆境を切り抜けて成功した女性の挿話が一寸必要なので、それを話してほしいが、例へばキュリー夫人のやうな日本女性がないかとのことであつた。

そのとき私は、自分の仕事のことと氣をとられてゐたので、突差に浮ばない。それで女性の人名辭書をお貸ししたのであつたが、あとから辭書では簡單すぎてかへつてお仕事の邪魔をした位ではないかと濟まない氣がしたが、そんなことで暫らく獨りになつて考へてみた。

キュリー夫人のやうな圖抜けた業績をもつ輝やかしい女性は、遠く紫式部などを措いては近代にはゐないやうであるが、女性の自覺運動とか、矯風事業とか、教育とかにつくし、あるひは最悪の條件から身を起して學位を獲得しなほ社會愛のために献身してゐるといふやうな女性は少くない。

たゞ、女性の社會的事業や、學問についての世間一般の認識が、面白くないので、實質以下に評價される場合が多い。

第一、傳記の書きかたが、これまでのものは非常にふるい。よい傳記作者が出て、もつともつとよく見直されたらと思ふ。(報知新聞、昭一四・一二)

故郷によせて二

いま私の家の周圍は、木といふ木が黄葉して、近年になくうつくしい。武藏野のこがらしは有名なものであるが、今年はまだ風がふかない。それで黄葉がしば

らく梢に保たれてゐるのである。

こがらしが一過すれば、これも一日のうちに落ちつくしてしまふ。

「ある獨想家たち」(森本忠)を興味ふかく讀んだ。私も「黙移」と「一商人として」を讀んでゐるので。

二著ともに個性のあざやかな、作者の強烈な精神力を感じしめる書であるが、それはしかし特殊のひとつでなければ興味をよばないといふやうな種類のものではなく、おそらく凡ゆる方面のひとつが讀んで、決して退屈しないものであらう。それのみでなく、たぶんその讀後感を他にも洩らさないではゐられないやうな、そゝられるものを豊富にもつてゐるのであらうと思ふ。

ことに「黙移」は、あまり目だつた廣告もしないのに賣れ行きがとまらず、近く第四版がでるといふのでも、それが口から口へ傳はつて行く結果であることが知られる。三版の巻末には諸家の批評集がつけてあるが、私は柳田泉氏その他多

くの人が、「明治女性史好資料」といひ、「明治の女性の目覺めの徑路」を眞實に傳へたものとして推してゐることに同感した。

「一商人として」は岩波版、「黙移」は河井醉茗氏主宰の女性時代社から出てゐる。また「黙移」前篇の内容をもつてゐる「廣瀬川の畔」といふのが、同社から出るといふ。更に私どもの感興をそゝるものであらう。

熊本女學校の校庭には、楓が澤山植ゑてあつた。寄宿舎の裏に小さな川があつて、吹き寄せられた落葉が、あるものは沈みあるものは泛んでゐた。さびしがりな私がぼんやりそれを眺めてゐたことを思ひだす。川の向ふは徳富屋敷とかいつてゐたが、ふかくは心にもかけなかつたが、蘇峯先生の在熊時代のお屋敷大江義塾の跡であつたのかも知れない。

私の窮迫時代の一つで、父は山奥の學校に左遷されるし、濟々疊に通學してゐる上の弟といつしよに古寺にゐたが、わづかな金で生活を支へてゐた時なので、

人知れぬ苦勞をもつてゐた。

その頃學校には古武士のやうな先生がゐられた。漢文の先生で鳥飼先生といはれた。

天長節の餘興劇に私は跛の役をふられた。私は跛になるのが悲しかつたのでその日は缺席した。

鳥飼先生が跛劇を女にはみつともないことだと非難し、私がわざわざ缺席したことを暗にほめられたといふので、皆が激昂してゐたらしいが、そんなことに迂濶な私は知らない。漢文の試験の時に、みんなが一人残らず白紙を出して、そろそろ退場してしまひ、私一人になつた。鳥飼先生は私の處にこられて、

「ゆるつと書きなはり、まだ時間はあるけん。」

といはれた。私は鐘の鳴るまでかゝつて答案を書いた。(この答案は不出來であつたが百點であつた)

一人の見すばらしい女生徒と、慷慨世と容れぬ先生とのこの蕭條たる姿をひと

は想像することができたらうか。

落葉の頃だつた。

去年のこの頃の日記から「熊藏の話」を抜く。

十一月三十日、はれ。井戸のところに仔犬あり。食餌をあたへねどこをつくる。

一日。仔犬捨てたるものならん。新しき魚の骨を藪よりひきだしてしやぶりをり。わが家にては數月、魚を食したることなれば。ねどこを更に南の縁の下につくる。熊に似たりとて熊藏と名つけぬ。

二日。熊藏と日向にでて遊ぶ。前の道に伴ひしに、路傍にはきためありて、物を漁るていなればひとりかへる。ほどへて見にゆきけるに、板の上にちよこなんと坐りて日向ぼつこしをりしが、われを認めて歸りきたる。夕方また伴ひしにまた獨りとゞまる。子供に發見され、その家につれ行かれたり。

三日。朝、さきの家にて熊藏の喚く聲きこゆ。たしかに救はれたるなり。實はこの仔犬では困つたのである。私はよほどそのまゝ飼ひたいと思つたが、犬にも猫にも氣がねするたちなので、仕事に差支へるといはれて断念しなければならなかつた。それで、豊富な食料をつけて人通りの多い原つばに置いて來ようと計畫中、よい具合に近所の家に拾はれたのであつた。毎朝、救はれた熊藏のわめき聲をきくのが何ともいへずたのしかつた。(日本談義、昭一四・一二)

世田ヶ谷より七

迎年祈世

紀元二千六百年の盛世にあふ。萬葉の詩人は、

みたみわれ生けるしるしありあめつちの榮ゆるときにあへらく思へば

と歌つたが、さらに私どもは、千年を下つて、こゝにその同じ幸をことほぐのである。

しかもこのとき、祖國はかつてなき大事業の第一期的完成を、この年にして果さんかに見える。たゞに祈らないではゐられない。

學問愛

故郷の妹の妙有尼が、その寺の法祖の傳記を送つてくれた。そこは三寶寺といふ田舎の小さな禪寺であるが、法祖は寶藏國師鐵眼で、傑僧である。こゝに生れた。

國語讀本卷十一に「鐵眼の一切經」として、その傳記がのせられてゐて、十三年度からの改定本には、三寶寺安置の木像の寫眞が挿入されたといふ。

一切經の版木は、山城宇治の本山に保存せられてゐるが、この版木は六萬枚から成り、ほほ堅が八寸、横が二尺六寸五分、厚さが五分で、これを假に燃料にす

ると、一枚で米一升を炊くことができ、一人一日の料を五合とすれば、十二萬日炊けることになり、優に三百二十八年の使用に耐へるといふ。

この一切經は、六千九百五十六卷、二千九十四冊である。鐵眼が、この大事業を一介の托鉢僧として發願したのは偉とすべきであらう。

難波月江院でこのことを聽衆に披瀝したとき、たまたま座中にあつた妙宇尼がその志に感じ、白金一千兩を喜捨した。鐵眼は、

「聞千尺高閣成在初基、今既有基刻成全藏必矣」

と喜び、直に黃檗山に登つて、これを隱元に告げた、すると隱元は、

「衰質未盡、聞此勝事、老僧願足矣」

といひ、自分が支那からもつてきた萬曆版一切經を原本として鐵眼に與へた。何といふ兩者の無邪氣な學問愛であらう。

瀉山警策

今年の座右銘みたいなものを高嶋先生の「瀉山警策講話」の中からえらんだ。

瀉山警策は、禪門學徒の間に専ら尊重せられてゐるものであるといふ。支那の瀉山大圓が、出家のために警策したものであるが、一般の人にとつても、むろんよい修養書であることは疑ひがない。

私が自分のためにえらんだのは、最後の章の結びのことばの第一である。

興_ニ決烈之志、開_ニ特達之懷、舉措看_ニ他上流、莫_ニ擅隨_ニ於庸鄙。今生便須_ニ決斷。想料不_レ由_ニ別人。

釋によれば、決定的に猛烈な志を起し、舉措すべて上位先輩を手本として向上を志し、つまらぬものを見習つて安逸懈怠に陥るな。明日を頼まずいま處決せよ。自分の學業行道は他人ではどうにもならない。自ら修證する外はない。といふのである。

猛烈な志を起せといふこと、最上にならへといふこと、而して自力自助の精神は、三位一體、離すことができない。女性はあらゆる女訓によつて、この反對

のことがよく教へこまれてゐて、このやうな警策の眞諦を解しがたくされてゐる
憾みがある。

碁や將棋などは、常に下段者とばかり對局をつゞけてゐると、その人の技倆も
おちるといふ。何にしても、安逸懈怠はいましむべきものであると考へ、鈍根を
努力によつて補はうとこれをえらんだ。(婦女新聞、昭一五・一)

結 び

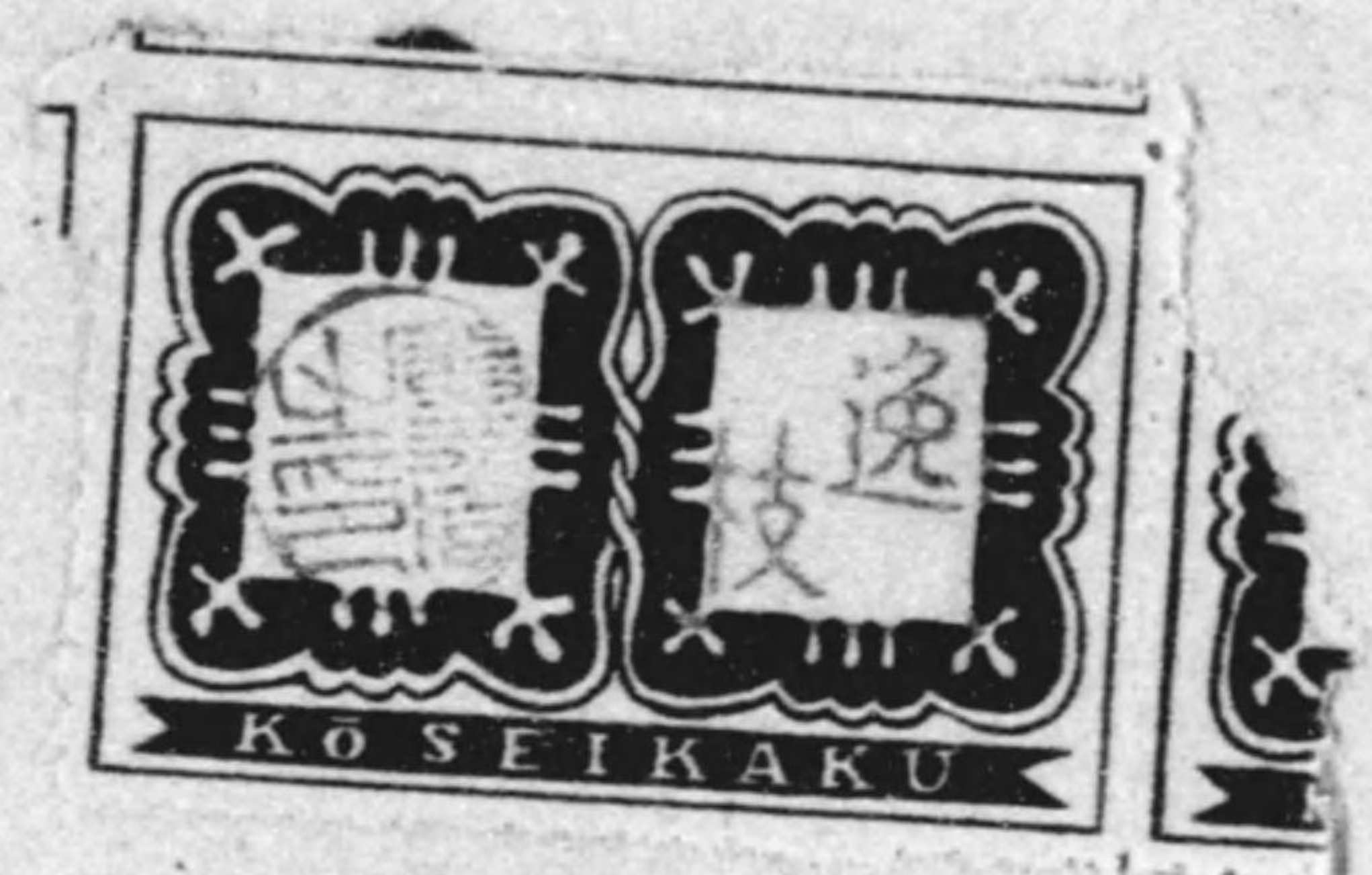
私は、あと十五年ぐらゐで所期の目的を達したいと思ふ。いくばくの價値ある
ものを書きうるかを私は知らない。たゞ、もうどんなことがあつても、引返せな
いことを知つてゐる。

私はこのごろ、苦しい仕事の後にはにがにお茶をのみたいといふ氣が時々する
ことがある。

お茶の歌、

ものおもひ疲れしときに一ぱいの
にがき番茶はありがたきかな
いたつきの怠りし日より何がなし
にがき番茶を戀ひそめしかな
憂きことの多かるなべに人間は
お茶のむすべを學びしならむ
夕月がほのかにさせばさそはれて
お茶を煮るなり吾れもこのごろ

昭和十五年二月七日印刷
昭和十五年二月十一日發行



女性二千六百年史

定價一圓五十錢

著者 高群逸枝

發行者 岡本正一
東京市麹町區六番町六番地

印刷者 鈴木芳太郎
東京市四谷區本村町四番地

印刷所 玄真社印刷所
東京市四谷區本村町四番地

東京市麹町區六番町六番地

發兌 圖書 厚生閣

電話九段三二一八番
總發東京五九六〇番

大日本女性史

著枝逸群高 序峰蘇富德

菊判總麻裝六頁八八
六圓十八錢送料廿二

母系制の研究

服部奉公會の補助金に輝く名著・面壁九年知友と塵埃を他に成れる未曾有の霸業

建國二千六百年我國に眞の女性史なきを慨き、面壁九年の悲願遂に成つて茲に先づ「母系制の研究」を産んだ。古代女性の國家的寄與及家族制度、婚姻制度の種々相を女性史眼を通して闡明したわが學界初發の大著である。要目 緒論 1 女性史の目的 2 母系制研究の意義 3 本書の材料 4 本書の方法 本論 序 1 祖と母系(祖の意義・姓氏錄に於ける女祖他六節) 2 氏と母系(氏の意義・氏稱の成立他三節) 3 姓と母系(姓の意義・姓の種類他三節) 4 賜氏姓と母系(賜氏姓の意義・附母子・他三節) 結論 1 國作り 氏作り 部作り 2 母系氏姓より父系氏姓への變化過程 3 多祖説・血の歸一 (三木清氏) 母系制といふ最も興味深いテーマを扱ひ、學界の宿題に答へた書。日本の一女性が日本の全女性の爲に建てた記念碑だ。

大日本女性人名辭書

菊判布裝本文六八〇頁美裝
價六圓八十錢 送料廿二錢

同じ著者による列傳體日本女性史・收載實に一千八百名に及ぶ

増補大日本女性人名辭書

德富蘇峰序 高群逸枝著

收九の錄百の盡出の
古の典を今女實明にか
性女實明にか
一性女實明にか
千り據にか

分類内容

皇祖、御宇、神話、傳説、祭神、國土神、國造、女酋
士蠻、神事、政治、軍事、政治、軍事、外交、産業、宗
教、教育、不祥事、公共、醫療、名族出自、名流妻母、
大奥女中、遊女、美人、騎人、毒婦、實業家、社會運動、
記者、スポーツ、殊勳、勤王、義烈、勇武、才智、坤德、
母として、妻として、子として、女訓、悲話、和歌、俳
諧、散文漢詩、狂歌、學問、書畫、工藝、演技、音樂、
婚姻、母系等の全分野に及ぶ。

附錄
歷朝(帝母、后妃)一覽、女院一覽、歷代實官表、歷代實院
表、字畫索引

菊判總麻裝 定價六圓十八錢
函入六八〇頁 送料三十三錢

高群逸枝著

お遍路

一笠一杖——金拾圓を懐ろに國を出た若き日の著者が約半歳に及ぶ行乞と野宿の四國遍路記。女性史完成の悲願に燃ゆる今日の著者が情熱と感傷で貫かれたありし日の哀歎で綴る新遍路文學であり案内記である。

内容 發端、伊豫(上・下)土佐、阿波、讃岐、歸路、後記

四六列三〇〇頁
定價一圓四十錢
送料十四錢

遍路と人生

四國の遍路の旅は、一個の人生縮圖である。その意味を私は自分の經驗を通じて考へて見ようとした、特に私と同じやうな悩みと悲しみを持つてゐられる人に、何かを語りたいたいふ希ひをもつて……皆さまからの色々のお教へを頂けたらと思ふ。(著者)

内容 私の遍路、諸家の遍路、遍路と人生、四國靈場記、遍路の文獻

四六列二八〇頁
定價一圓六十錢
送料十四錢

歴代歌人研究

國民歌人としての和歌文學の代表者達を傳記と作品の兩面から新しく見直し、權威と新しさの進歩を企劃研究に大に成す

- ◇柿 本人 麻呂
- ◇山上憶良・山部赤人
- ◇大伴旅人・大伴家持
- ◇紀 貫 之
- ◇藤 原 俊 成
- ◇西 行 法 師
- ◇藤原定家・藤原家隆
- ◇源 實 朝
- ◇賀茂真淵・香川景樹
- ◇良寛和尚・橘曙覽

全十冊完成・分冊發賣
四六列表紙中世裂地模標極彩色
函入本文各冊三百五十頁
定價各一圓八十錢送料各十四錢

- 文學博士 武田 祐吉 著
- 文學博士 佐佐木信綱 著
- 文學博士 尾上柴舟 著
- 文學博士 福井久藏 著
- 早大教授 窪田空穂 著
- 文學博士 森直太郎・尾山篤二郎 共著
- 文學博士 川 田 順 著
- 文學博士 久松 潜一 著
- 文學博士 相馬御風・辻森秀英 共著

豊田 武著 文學博士 辻善之助序

日本宗教制度史の研究

菊判總布裝三百餘頁口繪四面 定價三圓五十錢 送料十四錢

下村壽一氏（前宗教局長）推薦——豊田武氏が多年文部省に在つて宗教制度の調査に當られた業間の研究が世に送られることになつた。（略）宗教制度の主たる項目に亘つて各時代に於ける變遷を敘述し、就中明治以後の政教關係に重きを置いてあるが、透徹せる史眼に映じた新發見が隨所に見出される外、宗制寺法の起原沿革に溯りその典據を明かにせる出色の名著である。

抄容内

- 一、宗教制度の變遷概要 第一章上代 第二章中世 第三章近世
 - 二、寺院本末關係の發生とその發展 第一章寺院本末關係の發生 他三章
 - 三、寺院議決機關の成長 第一章寺院議決機關の發生 第二章議決機關の種類 他二章
 - 四、檀家制度の展開 第一章檀家制度の源流 第二章寺請制度の發達と檀家制度の強化 他
 - 五、江戸時代の寺領概説 第一章寺領の成立 第二章寺領の種類 第三章寺領の割合 他
 - 六、明治初年の寺領問題 第一章寺領の復興と宣教使の活動 他三章
 - 七、皇道宣布運動の進展とその意義 第一章神祇官の復興と宣教使の活動 他三章
 - 八、信教自由思想の發達と政教分離の經過について 第一章信教制限の歴史 他四章
- 附 佛教社會事業史の展望 明治宗教制度年表 索引

文學博士 清原貞雄著 【重版出來】

神道史

菊判頭註附九ポイント組 七百餘頁素引附 裝幀麻地古代臘脂背革 價五圓 送料二十二錢

嘗て洛陽の紙價を高からしめた名著「神道沿革史論」の著者清原博士は神道史研究の第一人者たること既に世の定評あるところ、本書は前著の絶版を好機とし、前著に次で完成せる博士畢世の大業にして、前説の誤謬を訂正せるはもとよりその後の研究を洩らさず網羅した。歴史家、神官等の必讀書。

抄次目容内

- 緒論 第一章「カミ」の語義 第二章神の種類 第三章神の性質 第四章祖
- 一、先儒の教 第五節宗教としての固有神道 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 二、佛敎の傾向から本地垂迹 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 三、佛敎の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 四、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 五、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 六、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 七、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 八、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 九、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 十、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 十一、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 十二、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 十三、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 十四、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 十五、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 十六、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 十七、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 十八、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 十九、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 二十、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 二十一、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 二十二、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 二十三、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 二十四、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 二十五、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 二十六、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 二十七、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 二十八、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 二十九、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 三十、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 三十一、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 三十二、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 三十三、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 三十四、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 三十五、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 三十六、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 三十七、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 三十八、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 三十九、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 四十、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 四十一、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 四十二、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 四十三、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 四十四、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 四十五、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 四十六、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 四十七、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 四十八、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 四十九、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 五十、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 五十一、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 五十二、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 五十三、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 五十四、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 五十五、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 五十六、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 五十七、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 五十八、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 五十九、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 六十、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 六十一、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 六十二、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 六十三、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 六十四、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 六十五、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 六十六、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 六十七、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 六十八、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 六十九、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 七十、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 七十一、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 七十二、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 七十三、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 七十四、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 七十五、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 七十六、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 七十七、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 七十八、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 七十九、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 八十、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 八十一、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 八十二、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 八十三、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 八十四、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 八十五、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 八十六、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 八十七、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 八十八、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 八十九、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 九十、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 九十一、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 九十二、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 九十三、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 九十四、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 九十五、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 九十六、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 九十七、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 九十八、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 九十九、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神
- 百、神の混合の難信附泰山府君 第二章佛敎輸入とその影響 第三章神佛混淆の傾向（第一節神

記紀歌謠新解

附上代歌謠拾遺

文學博士 佐佐木信綱 文學博士 折口信夫
文學博士 武田祐吉 序

相磯貞三著

土岐善麿氏

あはたゞしい時間の中で、僕は奮奮に入れる夜の最後の時間に相磯貞三氏の「記紀歌謠新解」を讀むことにしてゐる。これは若い學徒の尊敬すべき業績で、卒讀するには勿體ないほどの研究と言つていい。「文藝春秋」より

訓詁の新意義

……この書物には訓詁は固より、更に訓詁の土臺として先人の考へなかつた色々な古代學を網羅し、人類學系統の諸學であり、又形態發生學としての形をも見せてゐます。まづ此だけの準備を整へて立つた註釋書は近年珍しいとこの文を書きながら張り合ひを感じて居るのです。……相磯君、まづ第一に隅から隅まで古い歌謠に對する輝いた愛情に充ちてゐると言ふことが、何よりも此本を正しく善くして居ります。(折口博士の長序から)……相磯貞三君によつて新しく記紀歌謠新解の大著が出た。前人の尊い業績はおほむね紹介され、著者独自の識見でそれが批判されてゐる。(佐佐木博士序から)

菊初 判句 總索 布引 七裝者 〇〇頁 付引 錢十八圓六 錢二十二料送

